

消滅危機言語を書くための基本的なツールの作製

小川晋史 (熊本県立大学)

言語教育というと一般的に辞書や教科書などの基本的なツールがそろっていることを前提にしていることが多いが、少数言語や消滅危機言語の場合は事情が異なる。辞書や教科書以前に言語の表記法が確立していない場合すらある。文字にして書けない言語というのは立場が弱く、それが言語の消滅に拍車をかけているという側面もある。

発表者はここ10年ほどの間に、日本国内の消滅危機言語である琉球諸語（琉球諸方言）のすべてを包摂する統一的表記法を提案するなどしてきた。これは消滅危機方言の記録・保存・継承のための活動であって、研究成果の現地還元の意味もあるものである。本フォーラムでは具体的にどのような体制でどのようなものを作り、どのような活動をしてきたのかについて報告する。

具体的に作って提案しているものとしては表記法が中核にあるのだが、現代社会においては電子的に読み書きができることが重要なので、最近では琉球語の表記法を使って電子的に読み書きするためのフォントの開発も行った。また、表記法やフォントは開発して提案するだけでは広がりをもたない。表記法を持たない言語を母語とする人々はそもそも自分の言語を書くということについての感覚が薄い場合があり、表記法を使って作られた本などを具体的に示しつつ、書きたいという希望を持つ人には個別に講習会をするなどして書ける人を増やしていく必要がある。

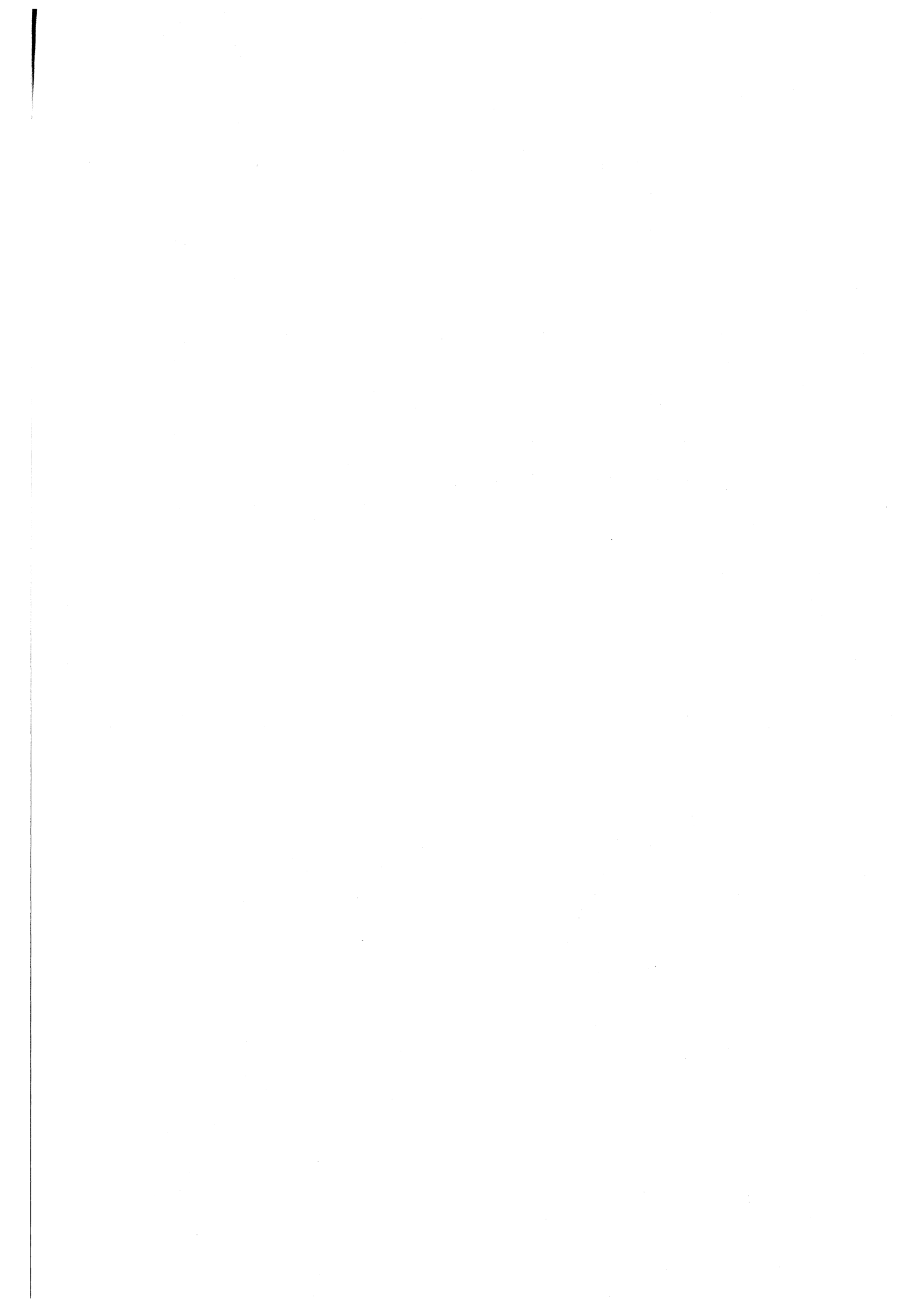
Making a basic tool for writing endangered languages

Shinji Ogawa (Prefectural University of Kumamoto)

Generally speaking, when we talk about language education, we assume that we have basic tools such as dictionaries and textbooks available for the languages. This is not the case for minor or endangered languages. Here are not even established ways to describe the languages. This further speeds up the disappearance of the languages.

The presenter has proposed a unified way of describing Ryukyu dialects over the last 10 years. This involves recording, saving, and passing on the dialects to future generations, thus contributing to local areas. In this presentation, I'll report on what I have been doing in this work.

At the heart of my proposal is a unified method of describing the Ryukyuan dialects. Today, it is important to have ways to read and write electronically. I have, therefore, worked on creating special fonts that can be used in the digital environment. I also promote the reading of books using the fonts and hold seminars for helping learners write in their dialect. In these ways, I have been working towards a necessary increase in the number of people who are literate in their own dialect.



消滅危機言語を書くための基本的なツールの作製

小川晋史（熊本県立大学）

1. 消滅危機言語と言語学習

言語教育（あるいは学習）と聞くと、一般にどのような風景が思い浮かぶだろうか。教室で辞書や教科書を使って先生から授業を受ける、というものが多くの人が思い浮かべるものではないだろうか。発表者もそれが一般的であると思う。しかしながら、対象言語が少数言語、あるいは消滅危機言語となると、その風景を思い浮かべることが多くの場合は難しい。発表者の活動対象である琉球（諸）語もそうだが、一部の方言で辞書こそあるが、大言語である日本語や英語のように教科書までがきっちりと整備されているという言語はほぼ無いと言って過言ではないからである。教育のカリキュラムを組むなどというレベルでは皆無であって、後述するように、そもそも辞書や教科書を作れるようになる以前にやるのがたくさんある。その一方で、世界中で多くの言語が消滅していく今にあって、先祖から伝わってきたことばを学びたい、記録したいという要望を持つ人々が地域にいるのもまた事実である。発表者は言語学者としてそういった地域の人々の役に立ちたいと発表者は考えている。これは研究成果の現地還元という考え方ともつながっている。平たく言うと、研究者が話者から言語データをもらったら、その話者たちに何かお返しをしよう／すべきという考え方である。

2. 具体的に何をすべきなのか

3点セットとも呼ばれる、辞書・文法書・テキストを特定の方言について作るというのが言語研究者の目指すべき1つの形であるけれども、現在の琉球語の現状を考えると、話者が比較的残っていて話者自身が言語の記録・保存に意欲的な場合もあるので、まずは一般の話者であっても自分の言語を書き残せるような状況を目指すという方向もある。こんなことを言うと「それはそんなに難しくないではないか、どんどん書いてもらえばいいではないか。」と感じる人もいるだろうが、それこそが大言語の発想であるとも言える。

実は、琉球語には汎用的な表記法というものがない。方言辞書などを作る際には個々の方言あるいは出版物の中で表記を工夫して書かれてきたというのが実状である。これだと、600ともいわれる細かい集落ごとの方言から構成される琉球語のことを考えたときには、辞書が作られていない方言を母語とする人はどう書けばいいか悩んでしまうのである。話者がそれぞれに我流の表記法を使って書いたら、1つの方言に様々な表記法があることで混乱を呼ぶこともあるだろうし、後世の人が書かれた者を見ても音を再現できないということもありえる。表記法というのは道に落ちているものではない。標準日本語であれば学校教育を通じて権威ある表記法を習得していけるわけだが、教育で用いられない琉球語の表記法というのは専門知識を持った誰かが強く勧めていかない限りは確立していくことはないだろう。まずは、そこから変えていく必要が

ある。

3. 表記法の提案

前節で述べた内容に鑑み、発表者は琉球語の一般向けの表記法を提案することにした。20 人弱の琉球語の研究者に声をかけたプロジェクトで、成果は 2015 年に『琉球のことばの書き方-琉球諸語統一的表記法』（くろしお出版）として出版した。この表記法の特徴は以下である。琉球語の話者が日本語の表記体系を知っているということを背景にしている。

- ・ 1つの表記体系で、琉球語のすべての方言が書ける。
- ・ 漢字は原則として使用せず、分かち書きを採用する。
- ・ 仮名文字基調で、日本語の表記体系で書けるものは同じにし、日本語の表記体系で十分に区別して書けない音についてのみ、新しい仮名文字や補助記号を導入する。

これによって、以下に示すように、琉球語の全く異なる方言が同じ表記体系で書き表すことができる。（それぞれ、上段が仮名表記、下段がアルファベット表記。）

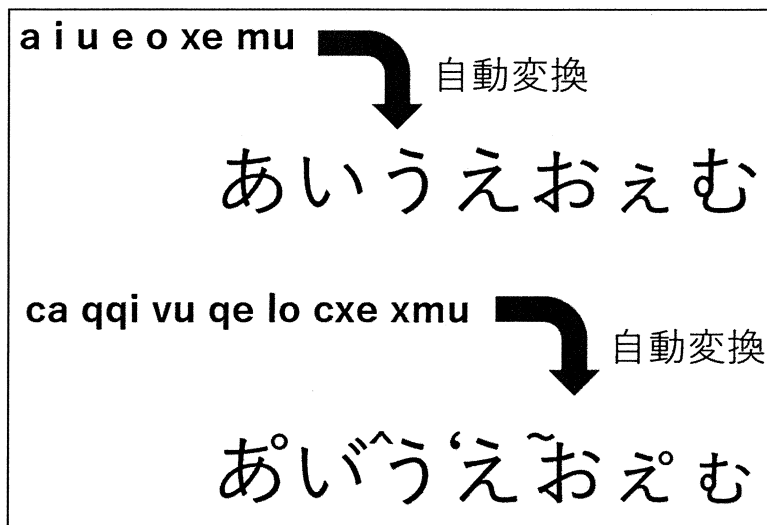
北琉球	奄美湯湾方言：	<u>うん</u>	<u>たい</u>	<u>だんごー</u>	<u>しば</u>	<u>うし</u>	<u>こーたん=ちい</u>
		un	t'ai	dangoo	shī	ushi	kootan=chī
		(その二人相談して牛買ったって)					
南琉球	宮古大神方言：	<u>すいま=ぬ</u>	<u>ぶすたー</u>	<u>むーな</u>	<u>うかなーり</u>		
		sīma=nu	pstaa	mmna	ukanaari		
		(島の人々は皆集まって)					

4. フォントの開発

表記法を提案しただけでは現代社会においては不十分である。今は手書きの時代ではない。電子的に効率よく読み書きできる必要がある。そのためには、表記法で提案している文字も（例えばパソコン上で）打ちやすくする必要がある。そのためにはフォントの導入は避けて通れないものである。発表者は 2017 年から 2018 年にかけて行ったプロジェクトで、提案した表記法に対応するフォントを開発した。「しま書体」（しま明朝体・しまゴシック体）という名前のフォントであり、以下のような特徴を持っている。

- ・ 「游明朝体」および「游ゴシック体」のカスタム書体であり、同じ書体設計士による。
- ・ リガチャーによる“自動変換”を採用し、IME : Input Method Editor を使わない。

これによって、以下のように日本語のローマ字入力と同じような要領で、アルファベットを入力することで、独特の補助記号付きの仮名文字などを出力することができる。



なお、Windows Wordで縦書きをしやすいするために、縦書き用のフォントと横書き用のフォントが分かれている（分けざるを得なかった）という特徴もある。現状では、WindowsOSでは使用できるアプリに制限があるが、AppleのMacOSでは大きな問題なく使える。

5. 表記法の普及活動と“教員”の養成

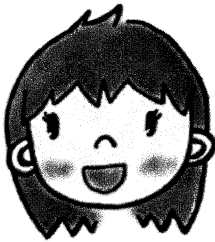
ここまで述べたように表記法を提案し、（それが受け入れられたとして）フォントを開発したとしても、様々な方言のための言語学習教材は作れない。まずは、その表記法（とフォント）を用いて各地で読み書きできる人を増やさなければならない。

これは到底1人でできるものではなく、各地で言語研究者に取り組んでもらう必要があるが、発表者は主に徳之島で活動を行っている。昨年までに、講演会や説明会を通じて地域の方言を書くことに興味のある人を集め、次に、方言の直感があつて（母語話者）、パソコンを使えるという条件を満たした数人に表記法とフォント使用の方法をレクチャーするという勉強会を行うところまで実施できた。発表者が琉球語のすべての方言に通じているわけではないので、これはその方言のことを知る言語研究者と共同で行う必要がある。この活動はいわば“教員”の要請である。言語の直感があつて、表記法を使って書くことのできる人がいなければ、言語の教科書は作れない。自身の母語たる方言を書ける人をまず養成して、その先に、ようやく方言を語学として教えるための教科書や方言を書くことのできる活動（演劇台本、など）が見えてくるのである。

発表者の活動も道半ばであるが、このように大言語と少数言語には学習環境の違いがあることを明確に述べておきたい。現在の日本国内に限定したとしても、日本には日本語と異なる琉球語を母語とする人たちがいて、その人たちには自分たちの母語で書いたり表現したりする環境が整備されていない。日本語の諸方言のほとんどが標準日本語の表記法を少し工夫すれば書くことができるため、本土だとあまり問題にならないが、琉球語の多くの方言は標準日本語にちょっとした工夫をただけでは書けない。自分の母語でしか的確に表現できない感情や状況がある

ことは誰もが理解できるはずだが、母語で書き、その書いたものを読んでもらえるという、日本語母語話者には当たり前の状況を与えられてない人々がいるのである。繰り返しになるが、これは遠い外国の話ではなくて、日本国内に母語の違いによる“格差”が存在しているのである。

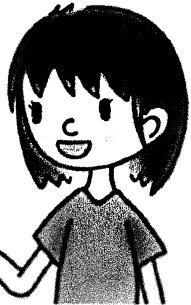
付録：表記法の説明会で使った資料の抜粋



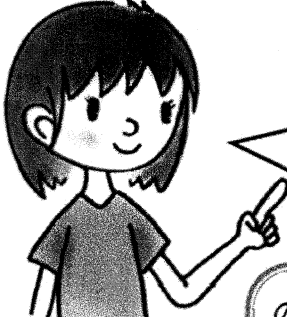
じゃあ、徳之島で使われる「2つの記号」について説明します！ 島口には、「あいうえお」の他に、「い」の唇で「う」を発音するような音と、「え」の唇で「お」を発音するような音があります。ちなみに、これを楽しい言葉で「中舌母音」といいます。

「い」の唇で「う」を発音するような音 → ○い°
「え」の唇で「お」を発音するような音 → ○え°

例えば、 木 ⇒ きい°
前 ⇒ めえ°



こういう母音は、大文字の仮名に小文字の「い°」や「え°」を組み合わせる表します。この、「°（まる）」が、日本語にはない、島特有の音という印です！



それから、島口には、のどの奥にくっと力を入れて強く発音する音もありますよね。そういう音には、仮名の前に「°（ちゃん）」を付けて表すんです。

のどの奥にくっと力を入れて発音する音 → °○

例えば、 今 ⇒ °な
馬 ⇒ °ま

今回の内容に興味を持って下さった方への資料・参考 URL など

「これからの琉球語に必要な表記法はどのようなものか」

(『日本語の研究』第7巻4号 99-111. 2011年)

発表者が琉球語表記法の理念を論じた論文。

『琉球のことばの書き方—琉球諸語統一的表記法』(くろしお出版、2015年)

発表者が実施したプロジェクトで琉球語の表記法について提案した書籍。

『しま書体 - しまの言葉を伝える書体』 <https://shimanomoji.site>

発表者が実施したプロジェクトで作成したフォントの販売サイト。

(※発表者には1銭も入りません。)

『消滅危機言語のための書体開発』(A Typeface for Endangered Languages)

<https://www.youtube.com/watch?v=ZYbrYsN4NEU>

文字に関する国際会議(ATypI Tokyo 2019)で発表者とプロジェクトメンバーが行った「しま書体」についての発表動画。英語字幕が付き。

『言語復興の港』 <https://plrminato.wixsite.com/webminato>

国立国語研究所の山田准教授たちが中心となって実施している消滅危機言語の継承保存プロジェクトのサイト。